

生ける水の川が流れ出る

ヨハネ福音書7:37-39
【新改訳2017】

- 7:37 さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立ち上がり、大きな声で言われた。「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。
- 7:38 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」
- 7:39 イエスは、ご自分を信じる者が受けることになる御霊について、こう言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ下っていなかったのである。

【祈りながら考えよう】

- (1) 「生ける水」を飲むことが出来る条件は何ですか。
- (2) 主を信じる者の内側から流れ出る「生ける水の川」の2つの約束を説明して下さい。
- (3) 39節のよれば、イエスを信じる者が受ける御霊はいつの時点で内住されますか。

【解 説】

(1) 主に呼びかけられている人の心の状態

さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立ち上がり、大きな声で言われた。

「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい」(37節)

今日の聖句は、聖書学者によって特別に「金の文字で印刷する価値がある」と言われてきた聖書箇所の一つである。ユダヤ人は、仮庵の祭りの儀式を行ってはいても、心に満足はなかった。彼らが家路に着こうとする直前の、「祭り」の最終日という重要な日に、イエスは立って彼らに大きな声で叫ばれた。「わたしのもとに来て、霊的な満たしを得よ」と彼らを招かれた。このことばは特に注意を要する。

主の招きの広さ

第1に、主の招きの広さに注目したい。分け隔てなく「だれにも」差し伸べられている。誰であっても、その人の状態がどうであっても、それまでの生活がいかに悪く、邪悪であっても、御手が伸ばされ、招きがなされている。

「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい」

福音は限られた人にしか提供されていないなどと言うことはできない。主の福音はすべての人に対する福音である。

飲む条件

次に、「条件」に注意したい。主イエスは「だれでも渴いているなら」と言われている。ここで言っている「渴いている」人とは、霊的に渴いている人のこと。それは飢え渴いた魂、罪を自覚し、赦しを求め、良心の平安を熱望している魂を意味する。

人は自分の罪に気づき、赦しを求める時、自分の魂の必要を深く感じ、助けと罪からの解放を心から切望する。そして、その時、主が「だれでも渴いているなら」と言われた時考えておられた心の状態にある。

自分が罪人であるということがわからなければ、救われたいとは決して望まない。自分が迷っていることに気づかなければ、発見してほしいとは望まない。自分の生活に大きな霊的欠損があることを自覚しないかぎり、その必要を満たしていただくために主のもとへ行きたいという願いは決して起こらない。

ペンテコステの日に、ペテロの説教を聞いたユダヤ人たちは「心を刺され、…私たちはどうしたらよいでしょうか」(使徒2:37)、ピリピの看守は「救われるためには、何をしなければなりませんか」(使徒16:30)と使徒たちに叫んだ。これらは共に「だれでも渴いているなら」という表現が意味していることが、実際に起こるとどのようなことばとなって現れるかの例である。どちらの場合にも「渴き」があった。

残念ながら、今日このような渴きを体験している者は、ごくわずかである。多くの者は救い以外のあらゆるすべてのものに飢え渴いている。お金、快樂、名誉、地位、放縦—これらが、彼らの熱心に追い求めているものである。

多くの人々の、自らの魂に対する不注意・無関心ほど、人間の墮落、人間性の完全な腐敗を明確に物語っているものはない。聖書が、生まれながらの人を「盲目な」「眠っている」「死んでいる」と呼ぶのは当然である。

(2) 提示された救済方法

わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」(38節)

イエスは言われた。「わたしのもとに来て飲みなさい」。主は、渴いた魂が、教会ではなく、説教者ではなく、洗礼の水ではなく、また主の聖餐式(パン裂き)のテーブルにでもなく、「ご自身のもとに」来るように招かれた。

「わたしのもとに来なさい」ということばは、語数が少なく単純である。キリストに「来る」ということは、キリストを信じることであり、キリストを「信じる」ことは、来ることである。

このすばらしいキリストの処方箋を用いることが、救いをもたらすキリスト教信仰そのものの秘訣である。神の聖徒とは、いつの世にあっても、信仰によってこの泉の水を飲み、罪から解放された男女であった。

彼らは福音を信じ、それを行動に移した。彼らは、自分自身のうちにあるよいところに信頼する気持ちや、世的なことを一切振り捨て、罪人として、信仰によってキリストのもとへ行った。

心から罪の有罪性を感じ、「渴きを覚えること」と、「キリストに行き信じること」は、天の御国へ至る2つのステップである。

(3) 差し出されている約束

主イエスは「わたしを信じる者は…その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります」と言われた。

このことばは、もちろん比喩的意味で言われている。2つの約束がある。1つは、「信仰によってキリストに来る者はみな、自分のうちに豊かな満たしを見いだす」という約束。

もう1つは、「信じる者は、自分の魂の必要が満たされるだけにとどまらず、他人への祝福の泉となる」という約束である。

約束の第1の成就は、現在生きている多くのキリスト者によって証明され得る。彼らの証言を集約してみるなら、信仰によってキリストに行った時、彼らは予期していた以上のものを、キリストのうちに見いだした、ということである。彼らは主を信じた時から、平安、望み、慰めを味わってきた。彼らは、どのような疑念や恐れに襲われようと、これらのものを、この世の何物かと取り替えることはない。彼らは必要に応じて恵みが与えられ、日々の力が与えられる。時として、自分自身に、自分の心に失望するが、キリストに失望することは決してない。

約束の第2の成就は、さばきの日まで決して知られることはない。その日には、信者ひとりひとりが、回心したその日から、どれほど他の人へ「よいこと」をする器として働いたかという善行の総計が明らかにされる。

ある人たちは、使徒たちや初期の福音宣教師たちのように、ことばを用いて、生きている時に善を行う。またある者は、ステパノや悔い改めた強盗のように、また殉教の死を遂げた宗教改革者のように、死ぬ時に善を行う。またある者は、バクスターやバンヤン(17世紀の英国の牧会者たち)などのように、著作を通して、死後ずっと経てから善を行う。どのような方法で善を行うにせよ、恐らくすべての信者が祝福の泉であったことが判明するであろう。

ことばや行いにより、説教や模範を示すことにより、直接的、間接的に、彼らは常に自分の証しを他人に残しているのである。彼らは、今はそれとわからないであろう。しかし、終わりの日に、それが真実であったことを知るであろう。キリストのことばは必ず成就する。

(4) 御霊はいつ下るのか

イエスは、ご自分を信じる者が受けることになる御霊について、こう言われたのである。

イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ下っていなかったのである。(39節)

これは、ヨハネ福音書によく出て来る説明的論評である。初めの部分をもう少し直訳すると、「主がこう言われたのは御霊に関することです」となる。

「…信じる者が受ける」これは「ご自分を信じる者が受けようとしていた」という意味である。主イエス・キリストを信じ受け入れた人はすべて神の御霊をもいただく、と教えている点で39節は重要である。言い換えれば、御霊は、回心後しばらくしてから人々に臨み、内住する、という一部の人の主張は正しくない、ということである。

この節は明確に、また、はっきりと、キリストを信じる人はみな御霊を受ける、と述べている。主イエスがこのことばを語った時点では、御霊は《まだ》与えられてはいなかった。

主イエスが天に戻り、《栄光を受け》られて初めて、御霊は五旬節の日に降臨されたのである。その時以後、主イエス・キリストを真に信じる人の中には、例外なく、御霊が住んでいる(ロマ8:9)。